

「僕の宝物」

藤岡 幸夫 (29 B)

今僕はブルガリアの首都ソフィアにいる。外は三月の中旬だというのに吹雪だ。大きな純白の結晶が美しく激しく空を舞っている。異国の街のホテルの一室で、ガラスの向こう側の風景に心が奪われる時、必ず「ああ指揮者になる夢がかなったんだなあ」と実感する。来週もきっと、小雨の降るリヴァプールで同じ事を想うだろう。

僕は、中等部に入學してすぐ、将来指揮者になることを決心した。小学生の頃は「指揮者になれたらカッコイイなあ」程度だったが、目白のカラドラル教会で、本番前のリハーサルをする小澤征爾さんの姿を見た時、全身に鳥肌が立ち、心が震えた。その時から来る日も来る日も指揮者になる夢を見続けた。ピアノも真面目に練習するようにになり、当然勉強はしなかった。いつも赤点ギリギリで、それでも気にならなかった。

中等部でのクラブ活動は、月水金が剣道部で、火木土が器楽部だ。毎日運動に音楽と好きな事が出来たのは、本当に幸せだったと思う。もっとも剣道部の方は、新しくレコードを買った時など早く家に帰りたいとよくサボった。それでも三年生の時、港区の個人戦で優勝して金メダルをもらったのは、いい思い出だ。(ただしこの時は、他の二つの強豪中学が試験中で欠場していた。)

素敵な思い出と言えば、初めてガールフレンドが出来たデイトをしたのが、一年生の終り頃だったと思う。となりのクラスのピアノの上手な彼女との最初のデイト場所はなんと秋葉原だった。石丸電気店のレコード館で、ラヴェルのピアノ協奏曲のLPを彼女にプレゼント(もしかしたら、彼女が自分のお金で買ったのかも知れない。)したのを憶えている。もう少し僕がアタマキていたら、せめて彼女が銀座に行ったであろうに、秋葉原とはちょっと寂しい。彼女はセー

ラーを着て彼女の家に遊びに行つて、僕がトランペットを吹いて彼女が伴奏してくれて、今から思うとかなりマセてた。(当時、僕は赤が好きで、地下鉄のホームで担任の瀬木さんに見つかり、例の口調で「ダメだそんなことでは。あまり派手な物を着るんでネエソ。」とお説教されてしまったのを憶えている。又、福島さんとは帰り道によく、音楽の話に花を咲かせたものだった。)

二年生の時、遂に生まれて初めて指揮をした。器楽部の指揮者になったのだ。普通、中学の音楽部の指導、指揮というのは先生がやるものなのに、生徒にやらせるというのはすごく中等部らしい。ましてや二年生である。これは音楽の本宿さんが、部員をよく信頼して下さったおかげで、僕にとって素晴らしい経験となった。二年生の時指揮をしたのは、「シエルプールの雨傘」と「ハンガリア舞曲第五番」、三年の時は、ムソルグキスキーの「展覧会の絵」から終曲「キエフの大門」で、晴れの舞台は中等部の音楽会だ。本番前に舞台の袖で、緊張するどころかワクワクしてたのを思い出す。たった15分程の出番で、汗びっしょりになってハアハアいいながら指揮してた。今思えば、あの時から夢に向かって歩きだしていたのだ。三年前、サントリートホールでデビューした時、演奏会後のパーティー会場の前で、真先に拍手をしてくれたのが、三年の時の担任の三浦さんを始めとする先生方、それに当時の仲間達だった。ほんの一瞬、中等部の音楽会で指揮した直後の自分に戻ったような気がした。

ヨーロッパに住んで七年になる。マネージャーがロンドンにいるので、一年の四分の三はヨーロッパで指揮してる。まだ僕は駆け出しな上に、外国のオーケストラとの仕事はしんどい事も多い。やめなくなる時だってある。そんな時、中等部にいたあの頃を思い出すようにしている。小澤征爾にあこがれて、指揮者になろうと決心した中等部時代の僕の夢は、本当に自分の中でキラキラしていた。今でもその輝きは僕の宝物だ。

夢に向かって歩き出させてくれた「中等部」//心の底からありがとう。